

内容紹介

2014年2月、猪瀬直樹氏辞任後の東京都知事選で細川護熙元首相が出馬し、小泉純一郎元首相が応援した。2人の共通項は、福島原発事故後のエネルギー政策だった。「危険でコスト高の原発をゼロにし、自然エネルギーによる循環型社会に転換すべきだ」。作家や映画俳優らを含む多くの支持者が応援したが、知事選は敗北。だが、その日から新たな脱原発への闘いが動き出した。なぜ、推進側にいた実力者は巨大な「原子カムラ」に対抗するのか。2人の元首相の今日までの活発な言動を詳しく追う。

初出

朝日新聞 二〇一四年八月十六日～九月四日

※本文内の画像は、W E B用のものを転用しているため、解像度が低い場合がありますが、ご了承ください。

第1章	始まりは3者会談
第2章	寒いけど、心が熱い
第3章	晴耕雨読から政治へ
第4章	ひび割れた蜜月
第5章	「森の長城」を築こう
第6章	講演で、踏み込んだ
第7章	亡き恩師からの遺言
第8章	歯切れよく「即ゼロ」
第9章	出馬、否定はしたが
第10章	今日発表しちゃおう
第11章	大物からのエール
第12章	40歳下からの提案
第13章	「宴のあとのツケ」
第14章	大敗、新たな一歩へ
第15章	再生エネで成長も
第16章	死ぬまでがんばる
第17章	まずは国民運動から
第18章	政界から関心なお
第19章	企業はバカじゃない
第20章	いざ人生の本舞台へ

第1章 始まりは3者会談

2014年2月の東京都知事選を戦った「細川・小泉連合」は、13年10月21日夜の会合から始まった。
東京都内の日本料理店。

座敷に、3人の男が座った。

元首相の細川護熙（もりひろ）（76）は焼酎。同じく元首相の小泉純一郎（72）は冷酒。元新党さきがけ代表代行の田中秀征（しゅうせい）（73）はウーロン茶。彼はまだ原稿執筆の仕事が残っていた。

政界のそれこそ真ん中にいた3人だが、表舞台から退いて久しい。

衆院議員だったころは勉強会をともにしたこともあった。だが、引退後は長らく顔を合わせていない。

新聞やテレビの政治記者も、まだ誰も気づいていなかった。

上着を脱いで、くだけた調子で言葉を交わす。

田中が持参したタブレット端末をのぞき込む。「秀征さん、何見てるの?」と、小泉。「将棋で羽生善治がタイトル戦やっているんだ」。ライブ中継をチェックしていたのだ。

すると、店のおかみが「それで写真も撮れるのよ」。端末を手にとり、記念写真をバシヤリと撮った。やわらかい表情がそろった。

だが、3人の顔が引き締まったときがある。

小泉が8月に視察したフィンランドの核廃棄物の最終処分施設「オンカロ」のことを話したときだ。

10万年後まで高レベル放射性廃棄物を密封しなければならない。かの地で進む途方もない計画について、小泉は詳しく2人に説明した。

「日本では核のごみの捨て場もない。原発をこのまま次の世代に残すわけにはいかない」

細川と田中は静かに聴き入った。

「原発をゼロにすべきだ」

3人とも同じ方向を見ていた。それをこの日、互いに確認し合った。

小泉と細川——。2人の元首相を取り持ったのは田中だった。

1993年にできた細川政権で細川の特別補佐を務め、01年にできた小泉政権では小泉の私的懇談会の座長を務めた。

「原発ゼロ」の訴えを強めた小泉に、細川が興味をもち、田中に持ちかけ、この日の顔合わせとなった。

このとき、東京都知事・猪瀬直樹の金銭スキャンダルは、まだ発覚していない。2人の元首相が組んで都知事選を戦うことになるとは、本人たちも思ってもいなかった。

第2章 寒いけど、心が熱い

「細川・小泉連合」を支える人たちの多くが、最も印象に残る場面としてあの日の光景を挙げる。

2014年2月8日夜、東京・新宿駅東口。投票票を翌日に控えた東京都知事選のたたかいが、クライマックスを迎えていた。

横なぐりの吹雪が舞う。からだが芯から冷えてガタガタと震える。

なのに、その広場と沿道はたくさんの聴衆に埋め尽くされた。選挙カーに、都知事候補の細川護熙（76）と応援弁士の小泉純一郎（72）の元首相コンビがよじのぼった。

黒いダウンジャケットに赤い帽子の細川が声をからした。

「日本は原発に頼って斜陽の道を歩むのか、それとも自然エネルギーによって新たな飛躍の時代を迎えるのか。大きな分かれ道なんです」

黄緑のダウンジャケットに身を包んだ小泉がマイクを継いだ。

「みんな真っ白い傘！ きょうは決して忘れない日になるね。こんなにおおぜいの人が雪の傘をしながら、熱い気持ちを我々に伝えてくれる。寒いけどみなさんのこの熱気を感じると、心が熱くなるよ」

前知事の猪瀬直樹が徳洲会グループから5千万円を受け取った問題で13年12月に辞任し、ふつてわいた都知事選。「原発ゼロ」の一点で細川と小泉がタッグを組んだ。

2人の相乗効果で、保守を含む幅広い支持が集まるだろう。そう期待した人たちが応援に集まった。

作家の澤地久枝（83）、音楽評論家の湯川れい子（78）、作詞家のなかにし礼（75）らが駆けつけ、マイクを握った。別の会場には俳優の菅原文太（81）も来た。

脱原発訴訟に取り組む弁護士の河合弘之（70）が演説でこう言った。

「いままで脱原発運動は私のような環境派か、脱原発専門家か、人権派か、左翼か、一部の限られた人たちだけでやってきた。それでは原発は止まらない。ぼくは20年間やってきたからそれを身に染みて感じている。保守・革新が力を合わせて脱原発する時代についてになったんだ」

湯川も、同じ思いを訴えた。

「私のような市民運動家が自分の仕事を犠牲にしていくらやったって何も変わらない。『小泉は米国のイラク攻撃を支持したじゃないか』と言う人もいますが、そんなことを言っている場合じゃない。細川さんのように、政府の中枢を揺さぶる都知事でなければダメなんです」

この日、都心では45年ぶりの記録的大雪となった。

第3章 晴耕雨読から政治へ

元首相の細川護熙（76）が衆院議員を辞職して政界を去ったのは、1998年5月。首相を退陣してから4年後のことで、ちょうど還暦を迎えた年のことだった。

細川は2004年に出した手記「不東庵（ふとうあん）日常」（小学館）に、こうつぶっている。

「60歳からの隠棲（いんせい）は前々から考えていたことだ。どうするかということも決めていた。それは『晴耕雨読』の実践である」

晴れた日は畑を耕し、雨の日は本を読む。晴耕雨読とは、そんな暮らしぶりをさす。細川はあわせて「閑居」という言葉も好んだ。世間の騒がしさから離れ、のんびり暮らす余生を過ごす決めていたのだ。

不東庵とは、政界引退後に細川が過ごす神奈川県湯河原の邸宅の名前。母方の祖父で元首相の近衛文麿が保養のために手に入れ、祖母がのこした。周辺には山菜が自生し、鳥のさえずりが聞こえてくる。

そこで細川は焼き物づくりを始めた。邸宅には「安土・桃山時代に負けない作陶」をめざし、窯やろくろを備えた工房を整えた。絵画や書にも手を広げ、やがて作品に買い手がつき、個展を開くようになった。

「よくもまだ政治の生臭いなかにいられますね。自分はもう、テレビも新聞も見ません」

細川は、後輩の政治家をよくそう言ってからかった。

だが、11年3月11日に起きた東日本大震災は、「閑居」を貫き通すことを許さなかった。

震災から数日後、細川は元民主党参院議員の円（まどか）より子（67）に電話をかけた。円は細川が92年につくった日本新党の結党メンバーだ。

東京電力福島第一原発が事故を起こし、1、3、4号機で水素爆発が相次いでいた。

細川が切迫した声で言った。

「福島第一原発は大丈夫なのか。石棺化が必要になるんじゃないか」

石棺とは、建屋をコンクリートで覆って密閉することをさす。

「いま情報を集めているところです」と円が応じる。細川は引き続き情報提供をするよう求めた。

震災から1カ月後の11年4月11日には円の仲介で、のちに復興相となる内閣府副大臣の平野達男（60）と首相官邸近くのホテルで会った。

晴耕雨読の日々から、現実政治の世界へ。動き始めた細川は、こう漏らすようになった。

「原発はすぐにゼロにしなければいけない」

第4章 ひび割れた蜜月

2011年晩夏、「脱原発」を掲げた首相の菅直人（67）が退陣した。8月29日、民主党は後継首相となる新代表に、野田佳彦（57）を選ぶ。

野田は、元首相の細川護熙（76）を「政治の師」とあおぐ。細川が1992年につくった日本新党に参加。非自民の細川連立政権ができた93年衆院選で初当選したからだ。

細川は民主党代表選で、「首相にふさわしい最後のとりで」と言って野田を応援した。党内の実力者の小沢一郎（72）と野田の会談も仲立ちした。はたして野田は、民主党政権で3人目の首相となった。

しかし、その師弟の蜜月も、長くは続かなかった。

「今こそ脱原発という旗幟（きし）を鮮明にしなければならないときだ」

野田政権の誕生後、細川は野田に直言した。そのとき、野田はだまっていたという。

その様子を、細川は11年暮れに発売された雑誌「世界」（岩波書店）の12年1月号で明かした。「政権は『脱原発』に舵（かじ）を取れ」と題したインタビュー記事だった。

細川は、誌上で宣言した。

「東日本大震災で、原発容認の非をさとり、脱原発に“改宗”しました。地震の脅威について改めて学ぶとともに、この地震列島においては、原発が制御不能な不完全なシステムであるということをしっかり学習したからです」

インタビューの最後は、こんなメッセージで結んでいる。

「政治家の思惑や業界への配慮、行政の木を見て森を見ないビヘイビア（ふるまい）など、様々な邪魔物を払いのけて、野田総理には今こそ大英断を強く望みたいものです」

原発容認の過ちを認め、原発ゼロヘカジを切るべし。

再度の勧告だった。だが、野田の反応は鈍かった。

11年12月16日、野田は記者会見で「発電所の事故そのものは収束に至ったと判断される」と福島第一原発の事故の収束宣言をした。

細川は憤り、嘆いた。

「収束なんてしていないのに、どうして収束宣言ができるのか」

野田は12年6月には、関西電力大飯原発（福井県おおい町）の再稼働を決めた。その後、政権は30年代の原発ゼロをめざす方針を打ち出すが、原発維持を求める各界の声におされがちな印象はぬぐえなかった。

細川の、野田への失望と現状への危機感は、募るばかりだった。

第5章 「森の長城」を築こう

2011年3月11日の東日本大震災からしばらくして、元首相の細川護熙（76）は旧知の植物生態学者に電話をかけた。

「先生、ご苦労されているようですね。私にできることがあったら、ぜひとも協力させてください」

電話の相手は、横浜国立大名誉教授の宮脇昭（みやわきあきら）（86）。11年4月、がれきを埋めて防潮林をつくる案を、政府の復興構想会議に提案した。だが、話が進まずに困っていた。

宮脇は土地本来の多様な広葉樹林を育てる専門家で、細川の熊本県知事時代（1983～91年）に「一村一森運動」を手がけた縁で、細川と知り合った。それ以来のつきあいで、92年の参院選に立候補を打診されて、固辞したこともある。

その2人が、震災をきっかけに、約20年ぶりに結びついた。

コンクリートの防潮堤はダメ。森の力で津波の衝撃をやわらげ、人びとの命を守る――。

宮脇が描く大事業の思想は、「自然との共生と循環」を重んじる細川の胸に響いた。

「先生、すばらしい構想ですが、やっぱりお金がないと実現はできません。財団をつくりましょう」

がれきを埋めることには環境省が難色を示していたが、細川は、宮脇を連れて閣僚らと面会。首相の野田佳彦（57）にもかけ合った。

12年7月、財団法人「瓦礫（がれき）を活（い）かす森の長城プロジェクト」が発足した。

細川が理事長、宮脇が副理事長になった。王貞治や石川さゆり、市川猿之助といった著名人が応援団に名を連ねた。寄付を募って植樹を進める母体ができあがった。

元参院議員の円より子（67）によると、細川は、コンクリートの防潮堤の建設計画を進める宮城県の方針に強く反発していた。

「知事選にだれか出せないか」

13年10月の宮城県知事選に向け、細川がそう漏らしたのを、円は覚えている。元首相の小泉純一郎（72）の次男で復興政務官の小泉進次郎（33）の名を口走っていたという。

思いつきのままで終わったが、細川はこの時点で、改めて政治を強く意識するようになっていた。

植樹は少しずつ進む。

14年5月31日、宮城県岩沼市が震災がれきでつくった「千年希望の丘」で植樹祭があった。復興政務官の公務として、進次郎も来た。

細川と同席して握手をかわし、それぞれ木を植えた。

第6章 講演で、踏み込んだ

2011年3月11日の東日本大震災から、まもないころだった。

元首相の小泉純一郎（72）が、脱原発ヘカジを切り始めた。

5月28日、小泉は地元の神奈川県横須賀市内で、日本食育学会・学術大会の特別講演をした。

演題は「日本の歩むべき道」。

話題は東京電力福島第一原発事故に及ぶ。そこで、踏み込んだ。

「日本が原発の安全性を信じて発信してきたのは過ちだった」

「原発が絶対に安全かと言われるとそうではない。これ以上、原発を増やしていくのは無理だと思う」

この発言を朝日新聞は翌日付朝刊（東京本社版）の社会面で報じた。

見出しは「原発の安全性 信じたのは過ち」だった。

01～06年の首相在任中、原発を推進する立場にあった小泉が、原発推進の「過ち」を率直に認めた。

それに、城南信用金庫理事長の吉原毅（よしわらつよし）（59）が敏感に反応した。

吉原は小泉と同じ慶応大経済学部卒で、10年後輩だ。城南信金は11年4月、「原発に頼らない安心できる社会へ」というメッセージをホームページに載せていた。

吉原は「危険な原発をこれ以上続けることはできないというのは国民的合意だ」と思っていた。

ところが、政官財の声やマスコミの論調はなかなかそうならない。危機感を募らせていた吉原にとって、この小泉発言はとても心強かった。

「原発事故という現実を目のあたりにしながら、いままで推進してきたからといって方向転換できないのはおかしい。今までを反省し、これからどうやって新しい方向に転じていくか。そこを小泉さんは考えてくれたんだと思ったんです」

吉原は、小泉を城南信金の「城南友の会」設立総会の講師に招いた。

12年4月23日、東京都港区のグランドプリンスホテル新高輪。

小泉は、1千人の中小企業経営者らを前に熱弁をふるった。

「日本はこれまでも、関東大震災や第2次世界大戦で多大な被害を受けながらも、そのつど、困難を乗り越えてきた。ただし、今の原発をこれから推進していこうというのは、ちょっと無理」

「苦しいけれど、原発への依存度を下げていこう。日本人は知恵もあるし、努力もする。ピンチをチャンスに変える努力をすべきだ」

小泉は「原発ゼロ」への訴えを強めていく。その背景には、ある恩師の「遺言」があった。

第7章 亡き恩師からの遺言

民主党政権が崩れ、原発容認の自民党が政権に返り咲いた。それから1カ月ほど後のことだった。

2013年1月30日、元首相の小泉純一郎（72）が大学時代から慕ってきた恩師が、この世を去った。

中曽根政権などのプレーンを務め、国鉄改革や小泉構造改革などにかかわった経済学者の加藤寛（ひろし）（享年86）だ。小泉と城南信用金庫理事長の吉原毅（59）は、慶大教授時代の教え子にあたる。

2月4日から3日間、城南信金は東京・五反田の本店に、加藤のお別れのを設けた。加藤は、城南信金のシンクタンクである城南総合研究所の名誉所長だったからだ。

政財界から弔問客が訪れた。その中には、小泉の姿もあった。

「原発に頼らない安心できる社会」をめざして、加藤と活動してきた吉原は落胆していた。

小泉が励ました。

「加藤寛先生の経済政策は、とても勉強になった。私もいまね、経団連に言っているんだよ。原発は即時ゼロにしなきゃいけない、と」

吉原が加藤を迎え、城南総研を立ち上げたのは12年11月。それを新聞で知った小泉はおおいに喜び、すぐに吉原に電話して「とてもいいことなんだから、ぜひがんばってくれたまえ」と激励したという。

加藤の主張は明快だった。総研の最初のレポートにはこう書いた。

「原発はあまりに危険であり、コストが高い。ただちにゼロにすべきです。原発がなくても日本経済は問題ないことは今年の原発ゼロですでに実証されています」

吉原も小泉も、加藤の理論と発信力に期待していた。だが、加藤はもうこの世にいない。

「小泉先生、こういうことなので、よろしくお願いします」

吉原はお別れ場で、小泉にこれからの協力を求めた。

それから1カ月半。吉原の尽力もあって加藤の最後の著書が出た。「日本再生最終勧告 原発即時ゼロで未来を拓（ひら）く」（ビジネス社）。巻頭にはこんなメッセージを掲げた。

「本書は私の遺言である。少なくとも『原発即時ゼロ』の端緒を見届けないかぎり、私は死んでも死にきれない。加藤寛」

その遺志を継いだのは、小泉だった。小泉は14年7月、城南総研の第2代名誉所長に就くことになる。

吉原が感慨深げに言った。

「これも、加藤先生の引き合わせかなと思う」

第8章 歯切れよく「即ゼロ」

2013年夏。

小泉純一郎（72）は「原発ゼロ」へ、一気にアクセルを踏み込んだ。

8月中旬、フィンランドを訪れ、核廃棄物の最終処分施設「オンカロ」を視察した。放射能が無害になる10万年先まで核のごみを密閉しなければならないという。

日本ではとても無理だと思い、原発をやめるべきだと確信する。

その転機を最初に伝えたのは、ひとつの新聞記事だった。

8月26日、毎日新聞に載った特別編集委員・山田孝男（やまだたかお）のコラム「風知草」だ。「小泉純一郎の『原発ゼロ』」の見出しが立つ。

「原発ゼロしかない」「ピンチはチャンス。自然を資源にする循環型社会を、日本が作りやいい」

歯切れのよい「小泉節」が並ぶ。

小泉はそれまでの講演で「原発依存度を下げる」「原発は増やせない」などと、慎重な言い回しをしていた。それが、「原発ゼロ」とスパッと断じるようになっていた。

10月1日、小泉は名古屋市で講演し、自らの肉声で訴えた。

「今こそ原発をゼロにする方針を政府・自民党が出せば、世界に例のない循環型社会へ結束できる」

「経済界では大方が原発ゼロは無責任だと言うが、核のごみの処分場のあてもないのに原発を進める方がよほど無責任だ」

報道各社はそれをいっせいに報じた。首相経験者の発言だけに、政権・与党には戸惑いが広がった。

首相の安倍晋三（59）も官房長官の菅義偉（すがよしひで）（65）も、小泉政権で汗をかいて政治家としての力をつけた。

とくに自民党幹事長や官房長官を小泉に任された安倍は、小泉を「政治の師」の1人にあげている。

だが、小泉は容赦しない。

11月12日、東京・内幸町の日本記者クラブ。けたたましくカメラのシャッター音が響いた。

濃紺のスーツと水色のネクタイ。ライオンヘアの小泉が、「原発をゼロにする時期はいつがいいと思うか」という記者の質問に答えた。

「原発を再稼働するとまた核のごみが増える。最終処分場は見つからない。すぐゼロにした方がいい」

「原発に代わる代替エネルギーに、原発に向けていた費用を回してはどうか。日本の企業なら、原発に代わるエネルギー源を発明し、開発していきますよ。早い方がいい。もう今、原発はゼロなんですから」

原発再稼働も許さない「即時ゼロ」を訴えた。

第9章 出馬、否定はしたが

2013年後半の話に戻る。

細川護熙（76）と小泉純一郎（72）が田中秀征（しゅうせい）（73）の仲立ちで会食してから1カ月余。師走を迎え、東京都知事の猪瀬直樹（67）は、進退窮まっていた。

医療法人「徳洲会」グループから5千万円を受け取った問題が発覚、辞職を求める声がおさまらない。

12月10日、静岡県熱海市の中華料理店で細川を囲む忘年会があった。

日本新党結党メンバーで元民主党参院議員の円より子（67）や、小沢一郎（72）に近い前衆院議員の木内孝胤（きうちたかたね）（47）らの姿もあった。

円がころあいをみて、猪瀬が辞めた場合の都知事選の話を振った。

「勝てる人、だれがいい人はいないですかね。ネームバリューもないとダメですよ」

細川は少し、首をかしげた。

「ネームバリューや知識があっても、都庁は職員を率いる統治能力、行政経験もないと難しいよ」

円は、すかさず打ち返した。「統治能力や行政経験だったら、熊本県知事も総理大臣も経験している細川さんがいいんじゃないですか？」

木内も言った。「細川さんなら、まとまりがいいですね」

「いや、私が出ることはありえないんだけど……」

細川は否定したというが、同席者は額面通りには受け取らなかった。

円は、そのときの細川の表情を「まんざらでもない」と読んだ。木内も「都知事選への関心が強くて、場合によっては本人が出るんじゃないかと思った」と振り返る。

細川とその周辺の動きは、この日を境に加速する。

小泉に、細川が出馬するかもしれないといううわさが伝わったのは、翌日のことだった。

「細川さんが都知事選に出るなら必ず応援する」

細川の周辺には、小泉からのそんな伝言が人づてに届いた。

ほどなくして金銭授受の説明に窮した猪瀬は辞職を表明する。

14年2月の知事選が決まった。

細川と小泉という保守の元首相2人がタッグを組む。掲げる旗は「原発ゼロ」。インパクトは大きい。都知事選は知名度がものを言う。

勝てるのではないか――。

細川周辺は色めき立った。

細川は、熟考の年の瀬を過ごす。

「私よりもっと若い人が出てくれれば」と漏らすこともあった。

だが、待ち人は現れないまま、年が明ける。

第10章 今日発表しちゃおう

2014年1月6日。

東京・西麻布のイタリア料理店。

細川護熙（76）をふたたび、日本新党時代からの側近や元参院議員の円より子（67）、前衆院議員の木内孝胤（たかたね）（47）らが囲んだ。

年頭発売の週刊誌は、東京都知事選で細川を小泉純一郎（72）が担ぐ可能性を報じていた。

木内が回想する。細川側近の一人が、細川にこう言った。

「晩節を汚してはいけない。仮にも総理をやった者が準備不足で立候補して負けでもしたらどうするのか」

逆に火がついたかのように、細川は強い口調で反論した。

「勝ち負けは関係ないんだ」

立候補の決意は固い。そう確信した木内は、選挙準備を急いだ。

数日後、細川は小泉と会談する店の手配を指示する。日どりは1月14日。細川の76歳の誕生日だった。

木内はホテルオークラの日本料理店「山里」を予約した。首相官邸に近く、政界ではなじみの店だ。

当日、細川が待つその部屋に小泉が現れた。テーブルには天井や吸い物が並ぶ。

細川が立候補への決意を伝えた。

小泉が二つ返事で答えた。

「徹底的に応援するから」

街頭演説に一緒に立つ。ホームページやビラに2人の写真を載せる。

2人の元首相の二人三脚による運動のかたちが、これで決まった。

ホテルにはたくさんの報道陣が詰めかけ、細川と小泉の話を聞こうと外で待機していた。

「きょう発表しちゃおう」

小泉はそう言うと、「お勘定！」と声を張り上げた。想定よりも少し短い約50分間の会談が終わった。

会談を終えた2人は、木内に誘導されて報道陣の前に並んだ。立ったまま、記者たちとやりとりする「ぶらさがり取材」が始まった。

まず、細川が決意表明した。

「都知事選に立候補をする決断をした。小泉元首相の強力なご支援をお願いしたいと申し上げ、『よし、自分もやるから』との話をいただき、本当に心強く思う。原発の問題は、国の存亡にかかわる問題だという危機感を持っている」

続いて、小泉が支援を明言した。

「細川さんが当選すれば、エネルギー問題、原発問題で、国政を揺るがす大きな影響力を与える知事になると思う。原発ゼロでも日本は発展できるというグループと、原発なくして日本は発展できないというグループとの争いだ」

第11章 大物からのエール

ソフトバンク社長室長（当時）の嶋聡（しまさとし）（56）の携帯電話が鳴った。

着信画面に、細川護熙（76）の名前が映し出されていた。

2014年1月10日のことだ。

嶋は元民主党衆院議員。細川には年賀状も出している。ただ、電話がかかってきた記憶はしばらくない。

本当に本人からだろうか。ひとまず名乗らずに電話をとった。

「細川護熙です」

たしかに細川の声だった。

嶋はとっさにこたえた。

「あけましておめでとうございます。歴史を変える行動を起こされると報道されていますが、期待しております」
すでに東京都知事選への立候補が浮上していることが、メディアをにぎわせていたからだ。

「ハラは固まりつつあります」と細川は応じた。近々、態度を明らかにするつもりだという。

嶋は興奮した。さっそく米国にいるソフトバンク社長の孫正義（そんまさよし）（57）あてにメールした。

「細川元首相が脱原発を掲げて都知事選に出ます」

孫はもともと脱原発論者で、東日本大震災の直後に、嶋と一緒に福島に入り、避難所も訪れている。

菅直人政権のころには、「再生可能エネルギー特別措置法」の成立にも汗をかけた。

ただ、ソフトバンクは13年夏、米携帯大手スプリントを買収して米国市場に参入していた。

このため「私は米国の仕事に集中しているとお伝え下さい」と書いてきた孫だが、数日後には「脱原発は国のために重要だ」と、共感をにじませたメールも届いた。

「からだが二つあればいいんだが……」とも孫は漏らしたという。

この意を受け、嶋は自らが裏方として細川を応援することを公言。ソフトバンクの社員も休暇をとって、陣営を手伝った。

細川の周りには、次第に応援団が集まっていった。

俳優の吉永小百合（69）の応援も陣営を勇気づけた。

吉永と細川は、長野・軽井沢の別荘が隣どうし。応援演説のマイクこそ握らなかったが、選挙事務所には吉永からのこんなメッセージが張り出された。

「細川さんの今回の大変な決断を、私は深く受け止めました。今私たちは、未来のことをしっかりと考えなければいけない時です。みんなで応援しましょう」

2014年1月23日、快晴のもと、東京都知事選は告示された。

細川護熙（76）のもとには多くの著名人が応援に集まった。

たとえば瀬戸内寂聴（92）。何度も京都から足を運び、走り回った。

「細川さんは76歳とかで、じいさんは引つ込めと言われているようですが、私は満91歳、数えて93歳。70歳から源氏物語を訳して76歳で仕上げた。以後も現役で働いている。だから、76歳なんてまだまだ！」

最初から最後まで先頭に立ったのは湯川れい子（78）。長年の脱原発論者で、前回の12年都知事選では、今回も立った日弁連の元会長、宇都宮健児（67）を応援した。今回は細川に賭けた。

「首相も熊本県知事もやった細川さんなら、権力中枢に入り込んで歯車が回せるかもしれない。千載一遇のチャンスだと思ったんです」

だが、そればかりではなかった。

2月1日、東京都内でインターネット番組の収録があった。

音楽家の三宅洋平（みやけようへい）（36）が細川と向き合った。2人の年の差は40。

三宅は若者の政治参加を訴え、13年参院選比例区で落選者中最多の17万票をとった。音楽や露店を楽しんで政治を語る「選挙フェス」を重ねて若者を引きつける。

三宅は細川に求めた。

「ぜひ、脱原発どうして融和をしましょう」

脱原発支持派は真っ二つに割れていた。宇都宮には共産党が支持しているというイメージ、そして細川には小泉純一郎（72）が応援しているというイメージ。三宅はこれを「同じ課題を両陣営が抱えている」と指摘して、「どう払拭（ふっしょく）していくかがポイントだ」と問いかけた。

一本化はもう無理でも、せめて細川と宇都宮が握手をする場面をつくって、分裂の傷を少しでもいやしたい。三宅は、そう考えていた。

細川はうなった。

「なかなか実現は厳しい。きのうも国会前に行きました。そしたらね。ちょっと入り込みにくいという雰囲気がありました」

その前夜、細川は小泉と国会前の脱原発デモを表敬に訪れた。同じ脱原発派なのに険悪な空気が漂った。

「脱原発どうしていがみあうのは、絶対にイヤだ」

三宅はそう言って、細川・宇都宮の両陣営を行き来する。そして、それぞれでマイクを握った。

「選挙が終わればノーサイドで前に進もう」

第13章 「宴のあとのツケ」

元首相の細川護熙（76）と小泉純一郎（72）が「原発ゼロ」を掲げて戦った東京都知事選は、その最後の日を迎えた。

2014年2月8日。

東京・数寄屋橋。

「細川・小泉連合」の仕掛け人である元新党さきがけ代表代行の田中秀征（73）が街頭演説に立った。

選挙中は前面に出ることを控えてきた。だから、このときが最初で最後の表舞台だった。

今回のたたかひの意義を、田中なりの視点で訴えた。

「我々は1千兆円の借金を残した。さらにもう一つ、捨て場のない核のごみを残すんですか。これは、私どもの世代の名において片付けなきゃいけない。片付ける道をつくらなきゃいけない」

細川と小泉、田中にとって、財政赤字と原発は似ているのだという。

田中に言わせれば、どちらも自分たちの世代が積み上げてきた「宴（うたげ）のあとのツケ」だからだ。

このとき、田中には古い記憶がよみがえっていた。

1996年、消費税率の3%から5%へのアップを決めた村山政権から橋本政権に移ったころだ。国民に負担を押しつけるだけではダメ。行政改革が必要と叫ばれていた。

その流れのなかで、細川、小泉と田中の3人が「行政改革研究会」をつくった。それも、田中の呼びかけによるものだった。

真っ先に取り組んだのは郵便事業への民間参入。小泉が政治人生をかけた郵政民営化に通じていた。

田中は研究会発足にあたり、細川がこう言ったのを覚えている。

「まず、小泉さんの郵政改革に協力しよう」

その小泉が今回は細川を支え、「原発ゼロ」をともに叫んでいる。

田中もその2人の力を信じ、ふたたび行動をともにすることにした。

街頭の反応はよかった。動員をかけていないのに、街頭演説はどこをみても、熱気に包まれていた。

だが、報道各社の情勢調査は軒並み細川の劣勢を伝えていた。

陣営には焦りが広がる。選挙戦終盤、小泉が選挙期間限定でもうけたツイッターで、こうつぶやいた。

「今日の荻窪・八王子・町田の街頭もスゴかった。だけど、街頭の反応と世論調査とどうしてこんなに違うのか。何度も選挙をし、街頭演説をしてきた僕から見るとこれなら圧勝のはずだが、調査結果は一位ではない。おかしい」

46・14%。記録的な大雪の影響もあったのだろう。

2014年2月9日が投開票日となった東京都知事選の投票率は、過去3番目の低さだった。

投票率が低ければ、組織票がものを言う。それが政界の常識だ。

細川護熙（76）は小泉純一郎（72）の応援を得て、政党や組織に頼らない「空中戦」を進めた。

結果は大敗だった。

自民党や公明党の支援を得た元厚労相の舛添要一（65）が約211万票で初当選。次点は、共産党や社民党などが推す元日弁連会長の宇都宮健児（67）で約98万票。細川は約96万票で3位に甘んじた。

準備期間が短かったこと。メディアで原発問題が争点としてなかなかとりあげられず、争点とさせまいとする力が働いたこと――。

細川は事務所での記者会見で主な敗因をそう分析し、応援してくれた人びとにわびた。

「日々感じていた街頭での熱気と選挙結果との落差の大きさに、改めて努力が不足していたことを痛感する。ご期待に沿えなかったことを誠に申し訳なく思っております」

ただ、細川に票を集中させることはできなかったが、脱原発を求める世論は根強いことも示された。

2人の元首相はすでに、次のステップをにらんでいた。

細川はこの会見の場で、活動を続けていくことを約束した。

「いまこの選挙が終わった段階から、私は今回一緒に立ち上がっていただいた志を同じくする方々と広く連携し、脱原発の活動をこれからも自分の信念として、しっかりと次の世代につなげていくつもりです」

そして、小泉からファクスで届いた自筆メッセージを披露した。

「これからも『原発ゼロ』の国造りを目指して微力ですが、努力を続けてまいります」

実際、細川はすぐに動き出した。

2月17日、月曜日のことだ。

細川が、東京・一番町のビルにある元参院議員の円より子（67）の事務所に現れた。

彼を支えてきた人たちが、10人ほど集まっていた。

細川と小泉のたたかいを支えた人は少なくない。2人の元首相のつながりを生かしながら、脱原発を求める世論をまとめ、実現につなげていくにはどうしたらいいのか――。

そうしたことを話し合った。

「原発ゼロ」を目指す、新たな歩みが始まった。

第15章 再生エネで成長も

季節は、春を迎えていた。

神奈川県湯河原で細川護熙（76）が暮らす邸宅「不東庵（ふとうあん）」を、小泉純一郎（72）が訪れた。元新党さきがけ代表代行の田中秀征（73）もいた。

不東庵の庭には、しだれ桜がある。樹齢200年近いという自慢の老木だ。春になると、細川は親しい人を招いて花見をする。

細川が小泉をもてなす。陶芸や書、絵画に打ち込む工房も見せた。

「本当にすごい芸術家だね」

小泉は、そう感嘆したという。

しだれ桜をみながら、歓談を楽しむ。小泉は、脱原発や再生可能エネルギー関係の本やDVDの感想を熱っぽく語っていた。

細川と小泉をトップにした脱原発の組織づくりの作業が進んでいた。もちろん、その話も出た。

準備会は東京駅前にあるビルに移る。細川が震災後に取り組んできた「瓦礫（がれき）を活（い）かす森の長城プロジェクト」の事務所が入った部屋だ。

新組織の事務局長には、前民主党衆院議員の中塚一宏（なかつかいっこう）（49）が就くことになった。

野田政権で金融相、復興副大臣を務めた。細川と相談しながら週1、2回、関係者との会合を重ねた。

3月半ば、そんな中塚に細川から投げかけがあった。

「小泉さんと相談したら、5月の大型連休明けに集会をやろうという話になりました」

中塚は「これはえらい急な話やな」と内心あせったが、急ピッチで具体化にとりかかった。

運営主体は一般社団法人。細川が代表理事で、小泉が発起人代表。発起人や賛同人には、都知事選で応援してもらった著名人の協力を得た。

正式名称は「自然エネルギー推進会議」になった。

「原発をなくすと経済が低迷するのでは」と心配する声がある。

このため、「再生可能エネルギーへの転換は、むしろ経済成長のチャンスだ」という訴えに、力を入れることにした。

設立総会を2014年5月7日に開く。集会名は「原発ゼロ・自然エネルギー推進フォーラム」。

大型連休前に関係先に配られた案内には、細川のあいさつを添えた。

「原発ゼロ・自然エネルギーの普及活動を積極的に推進し、原発に頼らない社会への転換を目指すため志を同じくする方々と一般社団法人自然エネルギー推進会議を立ち上げることにいたしました」

第16章 死ぬまでがんばる

2人の元首相が公の場に並び立つのは、約3カ月ぶりのことだった。

2014年5月7日夕。東京・永田町にある全国町村会館の会場は、開場前からおおぜいが詰めかけた。

「原発ゼロ・自然エネルギー推進フォーラム」

一般社団法人・自然エネルギー推進会議の設立総会を兼ねた集会が開かれた。

東京都知事選で敗れた細川護熙（76）と、それを支えた小泉純一郎（72）。2人をシンボルにした新しい活動の場が産声をあげた。

代表理事の細川が先に、あいさつのマイクを握った。

「この会議は原発の再稼働に反対し、原発から自然エネルギーに転換することによって『実感できる経済』をつくりあげていく。放射能の心配のない社会というものをつくっていく。それが第一の目標だ」

会場がおおいにわいたのは、それに続いてマイクを継いだ発起人代表、小泉の話だった。

「自然を大切に、自然エネルギーを推進して、世界からいい国だなと思われるように、これは死ぬまでがんばんなきゃいかんと思って、きょうは……」

万雷の拍手に小泉の声がかき消された。おさまると、話は都知事選のことに移って続いた。

「一つの戦場で負けたけども、原発ゼロの社会、自然を資源にする国造りに向かって進むのはすばらしいことだと、希望をもってきょうはやってきたんです」

「原発はコストが一番安い？ 国民の税金の負担なしにやっていける原発会社はひとつもないんですよ。こんなにわかりやすい話はない。日本の原発会社はカネまみれ！」

尻上がりに勢いを増して声を張り上げる「小泉節」。このとき細川は原因不明のめまいに悩まされていたが、小泉は元気そのものだった。

この日集まった関係者の間には、一つ共通の関心事があった。

14年10月の福島県知事選への対応だ。

パネルディスカッションで、音楽評論家の湯川れい子（78）がストレートに注文した。

「この秋は、福島の知事選があります。どういう人を出せるのか。せっかく、おふたりがいらっしゃるんですから、地方の首長たちをなんとか支援する組織づくりをしていくことができないだろうかと思っております。ぜひ、お力を」

最前列で聞いていた2人は、じつと黙っていた。

第17章 まずは国民運動から

自然エネルギー推進会議の設立総会。終わるとともに、たくさんの記者やカメラマンが、細川護熙（76）と小泉純一郎（72）の2人を取り囲んだ。

質問は2014年10月の福島県知事選を含む各種選挙や政治への対応に集中した。15年春には、統一地方選もある。脱原発を訴える候補を2人で応援して回るのかどうか――。

細川は「直接的には、選挙にはかかわらない」ときっぱり言った。

細川のとなりに立った小泉が、それを補うように説明した。

「候補者自身を応援することはありません。脱原発の国民運動として、次の世代に原発を残さないという運動に理解を示してもらえるような活動をしたい。国民の間に原発をゼロにしてほしいという大きな声が広がれば、政治も変わってくる」

そこへ、細川が付け加えた。

「脱原発の国民運動としてやっていく。政治的な運動、選挙にはかかわりたくないと思っています」

政治への関心を失ったわけではない。だが、東京都知事選では脱原発勢力が分裂して、あえなく敗れた。勝てる構図がつかれないまま、負けを重ねるようでは逆効果になる。

細川には、健康上の心配もあった。少し前に原因不明のめまいで意識を失って倒れ込み、口元にケガをしたことがあった。設立総会でも、こんなおわびを口にした。

「少し調子が悪くて頭がクラクラしておりますものですから、申し訳ございません。あまりはつきりしたお話ができなくて恐縮しています」

設立総会の1週間後、細川が推進会議の活動を休止すると報じたメディアもあった。だが、検査を受けた細川は、活動をやめなかった。

14年5月23日、東京・六本木の国際文化会館。推進会議の第1回発起人・賛同人懇談会があった。

講師に、ソフトバンク社長の孫正義（57）が創設した自然エネルギー財団から、理事長のトーマス・コーベリエル（スウェーデン・チャルマース工科大学教授）を招いた。

細川と小泉が迎え、世界のエネルギー事情について話を聞いた。

懇談会后、出てきた細川に記者から質問が飛ぶ。「体調は？」。細川は「大丈夫」と答えた。

推進会議事務局長の中塚一宏（49）が、健康不安説をぬぐう。

「ご覧になった通り。大変にお元気の様子とお見受けします」

まずは国民運動から。2人はゆるやかに動き出した。

細川護熙（76）と小泉純一郎（72）の両元首相をトップに「自然エネルギー推進会議」が船出した。

まずは、意見広告を出した。

2014年6月25日、読売新聞朝刊。

1ページをまるごと使い、右に細川、左に小泉の大きな写真。その真ん中に「自然エネルギーこそ飛躍の力。」と大きな字が躍る。

「3・11から学ぶべきことーそれは、命の大切さと自然の持つ巨大な力。だから、原発は要らない。全ての資金と人材を自然エネルギーに注いで新しい日本をつくりましょう」

さらに「原子力から自然エネルギーへの政策転換」「原発輸出ストップ」「再稼働せず、原発ゼロを維持」「自然エネルギーで経済成長」と、訴えの柱を列挙した。

読売新聞といえば2013年10月、社説が小泉の原発ゼロ発言を「見識を疑う」と批判。小泉が反論を寄稿し、異例の紙上論争に発展したことがある。

脱原発運動にかかわらない保守層に、訴えを広めていく。それが推進会議の活動のポイントなのだ。

7月18日には、東京・虎ノ門で、分散型エネルギーの専門家エイモリー・ロビンスの講演会を開いた。ロビンスの著書「新しい火の創造」は、小泉が「原発ゼロを確信した」と絶賛した脱原発のバイブルだ。

会場には、細川、小泉に加え、さらに2人の元首相が姿を現した。

民主党の菅直人（67）、鳩山由紀夫（67）だ。

もつとも、菅と鳩山が合流して4人そろって活動をともにすることになったわけではない。菅は講演後、取り囲んだ記者にこう言った。

「原発事故を深刻に受け止められて、細川さんも小泉さんも立ち上がられた。それぞれの立場で、協力できるところは協力する。それぞれ原発ゼロに向かって進むということでは、共通した考え方を強くもっていると思う」

推進会議事務局長の中塚一宏（49）は記者にこう説明した。

「鳩山・菅両元首相が一般参加でお申し込みになられていて、私も一昨日の夕方に知ってびっくりした」

この国民運動がどう転ぶのかは、まだだれもわからない。しかし、「細川・小泉連合」への政界の関心はしぼんでいない。

細川も体調を取り戻し、この夏には、太陽光発電の視察のためイタリアに出かけた。

次のイベントには、6人の国会議員OBが集結する。

第19章 企業はバカじゃない

太陽光、風力、地熱、水力、バイオマス……。自然の力を生かしたさまざまな再生可能エネルギーの最新技術が紹介されている。

2014年7月31日、午前10時、東京都江東区の東京ビッグサイト。

太陽光発電の総合イベント「PVジャパン2014」と、「再生可能エネルギー世界展示会」。その二つが合同で開かれた。

開場してすぐに細川護熙（76）、小泉純一郎（72）がそろってゲートをくぐった。

企業のブースの間を縫うように、主催者の説明を聞きながら進む。

原発メーカーでもある東芝のブースにさしかかると、小泉が我が意を得たりとばかりに叫んだ。

「原発やってる企業だって、再生可能エネルギーの準備を始めているじゃないか。原発なしでやれるよ。原発なくても大丈夫だ！」

この視察には、細川、小泉を含め総勢6人の元衆院議員が参加した。

元新党さきがけ代表代行の田中秀征（73）、元自民党幹事長で小泉と近い中川秀直（ながかわひでなお）（70）、細川と小泉が率いる自然エネルギー推進会議事務局長の中塚一宏（49）、ソフトバンク顧問の嶋聡（56）。

中塚と嶋は民主党出身だ。

そのなかで先頭を切って歩き、集団をリードしたのは小泉だった。新しい試みの数々を目の当たりにしては、目を輝かせた。

例えば、北海道別海町で建設が進むバイオガスプラントの計画を紹介するブース。小泉が家畜の排泄（はいせつ）物を使った発電技術に興味を持ち、担当者を質問攻めにした。

「どんな家畜？」「牛のふん専門？」「へー、生ゴミも！」

1時間ほどで、すべて見終わった。細川と小泉が並んで、報道各社の取材に応じた。

「原発いらないな」と、細川。

続いて小泉が能弁に語り出した。

「企業は先を見越している。政治が原発ゼロにするとすれば、だーっと動くよ。再生可能エネルギーに。企業はバカじゃないですよ。将来を見越せば、原子力よりも再生可能エネルギーの方が展望がある」

記者から「原発はあきらめるしかないか」と質問が飛んだ。

「あきらめるしかない。いずれ、必ずなる。時間の問題だ」

小泉はそう言い、首相時代を思わせるような大見えを切った。

「政治が責任を取らなくてはいけない。政治が原発を導入したんだから政治がゼロにする」

第20章 いざ人生の本舞台へ

小泉純一郎（72）が「原発ゼロ」への決意を語るとき、よく引用する大政治家の言葉がある。

「人生の本舞台は常に将来に在り」

国会議員を63年間務めた「憲政の神様」こと尾崎行雄が亡くなる1年前の94歳のときにのこした揮毫（きこう）だ。

東京・永田町の憲政記念館の玄関の石碑に刻まれている。

2014年7月7日、東京・丸の内の東京国際フォーラム。「日本の歩むべき道」と題する小泉の講演があった。主催した日本公認会計士協会東京会によると、サテライト会場を含めて用意した約4千席が埋まった。小泉が「原発推進の論理は完全に破綻（はたん）している」と熱弁をふるう。最後に、死ぬ直前まで将来の「本舞台」に備えた尾崎のその言葉を引いて、こうしめくくった。「常に将来を考える。舞台に立てよう準備をしよう、死ぬまで努力せよ、と。私のおやじは65歳で亡くなった。私も65を過ぎたら死んでもいいと思っていたが、70すぎても死ぬのは早いと思うようになった。人間の考えは変わる」

小泉が備える「人生の本舞台」。それは何を意味しているのか――。

小泉と細川護熙（76）を支える人たちは、そこに注目している。

小泉の発信力と勝負勘、細川の行動力と豊かな人脈。

その相乗効果で、2人に「原発ゼロ」を実現する政治勢力の結集軸になってほしいという願いからだ。

「小泉をトップにすえた政治団体づくりを」

「野党の実力者も巻き込んで枠組みを強化してはどうか」

応援団の間では、そんなさまざまな構想や提案が飛び交う。

2人が活動拠点とする自然エネルギー推進会議の事務局長、中塚一宏（49）は「選挙をやるのは政党の仕事だから、社団法人の推進会議が選挙に直接かかわることはない」と断りつつ、こうも言う。

「日本中に脱原発を広げなければならない。そのときは、老練な2人の判断がものを言う。『大欲は無欲に似たり』というじゃないですか。いまは淡々と。でも動くときは一撃必殺。私はそう思う」

じっと時機をみる2人の元首相。小泉は最近、こう漏らしたという。

「ときがくれば、おもしろいことになるよ」

プロメテウスの罠〔 5 2 〕 2 人の首相「原発推進の論理は破綻している」

著 者 朝日新聞（前田直人）

発行所 朝日新聞社

〒104－8011 東京都中央区築地5－3－2

<http://www.asahi.com/>

発売所 朝日新聞社デジタル本部

〒104－8011 東京都中央区築地5－3－2

<http://www.asahi.com>

2014年9月18日 WEB新書版発行

2015年12月31日 EPUB版発行

©2015 The Asahi Shimbun Company

All rights reserved. No reproduction or republication without written permission.

ISBN 978-4-86612-555-8

〈ご注意〉本コンテンツは、購入者個人の閲覧目的のためのものです。私的範囲を越える利用・譲渡などは禁止します。

〈おことわり〉本コンテンツは2014年9月18日に刊行されたWEB新書版を底本としました。EPUB版の刊行にともない、体裁や表記を直した場合があります。企業、組織などの名称、人物の役職、肩書等はいずれも記事初出当時のものです。